B-6

使役接辞-(s)aseの意味機能*

前田宏太郎
東京大学大学院／日本学術振興会特別研究員
maeda-kotaro731@g.ecc.u-tokyo.ac.jp

要旨

本稿は使役接辞-(s)aseの意味機能が単に「動詞が表す事象に使役主を導入すること」だと主張する．この主張は，-(s)ase接辞を含む述語形式が直接使役を表す場合があることから支持される．従来，-(s)ase接辞は間接使役を表す接辞としてみなされることが多かったが，「間接性」の解釈は-(s)ase接辞以外の語彙的使役形態によるブロッキングの結果，推論されるものであると考える．「間接性」はプリミティブな意味概念ではなく「実現可能性」に帰することができる．このことによって，ブロックされた-(s)ase接辞を含む述語形式が被使役主に動作主をとる場合と被動者をとる場合に対して統一的な説明を与えることが可能になる．また，-(s)aseの意味機能を単純化することによって，-(s)ase と-(s)as の違いが捉えられなくなるという懸念が生じるが，その違いは，本稿で新たに提案する「-e接辞テスト」を用いることで区別される．

1. はじめに

一般的に，使役接辞-(s)aseを用いる統語的使役（syntactic causatives）は間接使役（indirect causation）を，語彙的使役（lexical causatives）は直接使役（direct causation）を表すとされ，(1)と(2)に示したように，[1] 実際にそのような傾向は見られる．

(1) a. 先生が生徒を並ばせた（narab-(s)ase-ru）．
　　b. 先生が椅子を並べた（narabe-ru）．

(2) a. #先生が椅子を並ばせた．
　　b. #先生が生徒を並べた．

統語的使役は，被使役主（causee）が基体動詞の動作主（agent）であり，例えば，(1a)の「生徒」は自ら動いて並ぶため，間接使役とみなされる．対して，語彙的使役は，被使役主が被動者（patient）であり，例えば，(1b)の「椅子」は自ら動いて並ぶということはしないため，直接使役とみなされる．したがって，被使役主を入れ替えた(2a)と(2b)はそれぞれ不自然であると判断される． 以上のことは，三宅（2018）が次のようにまとめている．

(3) 因果関係の直接／間接性に基づく分類[2]
　　A：「間接的」−「複合的事態」−「埋め込み構造」−「文法的（迂言的）」
　　B：「直接的」−「単一の事態」−「単文構造」−「語彙的」　（三宅, 2018, p. 28）

確かに，(1)や(2)のようなデータを見る限り，使役接辞-(s)ase は間接使役を表す統語的使役専用の形式のように思えるが，(4)に示すように，-(s)aseが常に間接使役を表現するとは限らない．

(4) a. 花子が自分の好きな歌をクラスに流行らせた（hayar-(s)ase-ru）．
　　b. 太郎が靴音を響かせた（hibik-(s)ase-ru）．
　　c. 花子がワックスで床を光らせた（hikar-(s)ase-ru）．
　　d. 太郎が隙間に板を噛ませた（kam-(s)ase-ru）．
　　e. 花子がジャンプして床を軋ませた（kisim-(s)ase-ru）．
　　f. 太郎が箒を天井に届かせた（todok-(s)ase-ru）．
　　g. 花子が太郎にお金をちらつかせた（tiratuk-(s)ase-ru）．

* 本研究は，JSPS科研費 JP20J12446の助成を受けている。また，本稿の内容に貴重なコメントを下さった，伊藤たかね氏及び伊藤ゼミのメンバーに感謝申し上げる．

[1] #（シャープ）は文法的だが容認度が低いものに用いる．

[2] ここでの「因果関係」は本稿における「使役」に等しい．

h. 水をしみこませる（simikom-(s)ase-ru）.
i. 花を咲かせる（sak-(s)ase-ru）.
j. 野菜を腐らせる（kusar-(s)ase-ru）. （h-j，宮川, 1989, p. 205）

(4a-j)ではいずれも，被使役主が被動者であり，直接使役を表しているが，ここで挙げた動詞は主に非対格動詞であり，また，冒頭の「並ぶ・並べる」タイプの動詞とは異なり，いずれも語彙的使役に対応する形態を持たない動詞である点が重要である．すると，被使役主が被動者である場合にはどの動詞のタイプにおいても常に直接使役が表されるように思われるが，(5)に示したように，「並ぶ・並べる」のような語彙的使役形態を持つ動詞でも -(s)ase 接辞を用いた述語形式が被使役主に被動者をとり，間接使役を表す場合がある（定延, 1991）.

(5) a. この凝固剤を使うと，プラスチックを早く固まらせることができる.
（高見, 2011, p. 152）
b. 『ご存じのように当自動車レース同好会では，いつもレース前には注意書の回覧を行い，会員に安全運転を呼びかけています．しかし最近は注意書が，回覧途中で紛失したり，また回覧が非常に遅滞したりと，まともに機能しなくなってきています．次回のレースでは，会員の皆さんの良識に期待しております』事務局からこのような通知を受け取った会員たちは，次のレースでは全員一致団結して，注意書をなんとか正常にまわらせた.
（強調は原文．定延, 1991, p. 126）
c. そのピアニストたちは 20 時間コンサートと題して，全部弾くのがざっと一日かかるという曲を交代で引き続けることにした．演奏は順調に進んだが，最後の奏者の指が急にもつれ，一瞬，曲がとだえそうになった．（たのむ，≪ヴェクシオン≫をなんとかうまく終わらせてくれ）と，舞台裏の皆は一心に祈った．（強調は原文．定延, 1991, p. 127）
d. 太郎は何十キロもある荷物を 2 階から勢いよく床に落とし，落下地点の近くに置いてあった椅子をそのはずみで倒れさせた. （強調は原文．定延, 1991, p. 128）
e. 彼が｛念力／磁力｝で椅子を倒れさせた.
f. 彼が｛念力／磁力｝で椅子を舞台に上がらせた. （定延, 1991, p. 143）
g. ストパーいらず？！髪を広がらせないおすすめのヘアケア商品をおしえてください.
（https://pmall.gpoint.co.jp/g-ranking/ranking.php?themeid=36968）
h. 論文タイトル「望み通りに分子を並ばせる：分子科学から超分子科学へ」
（大月・荒木, 1997）

(5a-h)に挙げた動詞は，それぞれ「固まる・固める」「回る・回す」「終わる・終える」「倒れる・倒す」「上がる・上げる」「広がる・広げる」「並ぶ・並べる」のように語彙的使役形態を持つ.

以上から，動詞のタイプと-(s)ase 接辞を含む述語形式の関係は記述的な観察事実として，次のようにまとめられる.

(6) ある動詞が語彙的使役形態を
(i) 持たない場合，-(s)ase 接辞を含む述語形式は直接使役を表す（ことができる[3]）
(ii) 持つ場合，-(s)ase 接辞を含む述語形式は間接使役を表す

(6i)の場合，-(s)ase 接辞は直接使役を担い，語彙的使役形態を派生する接辞として機能する（Miyagawa, 1984; Miyagawa, 1998; Harley, 2008）．[4] (6ii)の場合，被使役主が動作主であるか被動者であるかにかかわらず，-(s)ase は間接使役を担う．このように見ると，-(s)ase 接辞には 2 つのタイプが存在するように

[3] 「ことができる」としたのは，本稿では十分に取り上げることのできなかった非能格動詞及び他動詞（e.g. 歌う，読む）が語彙的使役形態を持たないにもかかわらず，-(s)ase 接辞を含む述語形式が間接使役を表す点を考慮に入れてのことである（e.g. 花子を歌わせる，太郎に本を読ませる）．但し，この種の動詞の-(s)ase 接辞を含む述語形式が埋め込み構造を持つ間接使役を表すことは，3 節で述べる「実現可能性」の観点から説明される.

[4] したがって，記述の観点からも-(s)ase 接辞も語彙的使役形態を派生する接辞としてリストしておくべきだと考える（cf. Jacobsen, 1991; Matsumoto, 2018）.

思えるが，本稿では-(s)ase 接辞の意味機能を単に，

(7)　ある動詞が表す事象（event）に，それを引き起こす使役主を付加すること

であると主張し，-(s)ase が間接使役を表す(6ii)は副次的に生じるものと考える．

2.　被使役主の主体性

久野（1973）や Shibatani (1973) などで指摘されてきたように，-(s)ase は埋め込み構造をもたらすことが本質的な機能であると考えられている．埋め込み構造を持つ場合があることは，以下で示す「自分」テスト，「そうする」テストなどによって支持される．

(8)　a.　太郎 $_{i}$ は二郎 $_{j}$ に自分 $_{i/*j}$ について話した．
　　b.　太郎 $_{i}$ は二郎 $_{j}$ に自分 $_{i/j}$ の家で勉強させた．　（久野，1973, pp. 191-192）

(9)　a.　太郎が次郎を止めると，花子もそうした．
　　①花子も次郎を止まらせた　②*花子も止まった
　　b.　太郎が次郎を止まらせると，花子もそうした．
　　①花子も次郎を止まらせた　②花子も止まった　（Shibatani, 1973, p. 355）

(8b)において，主語指向性を持つ「自分」が二郎も先行詞にとれることから，「二郎が勉強する」という文相当の単位が埋め込まれており，(9b)において，「止まる」が「そうする」で代替可能であることから，「次郎が止まる」という文相当の単位が埋め込まれていると想定できる．

そこで，これらのテストを被使役主が被動者である(4)に挙げた述語形式に適用すると，埋め込み構造がないという判定になる．

(10)　太郎 $_{i}$ が靴音 $_{j}$ を自分 $_{i/*j}$ の部屋で響かせた．

(11)　花子が床を軋ませると，｛太郎も／*天井も｝そうした．
　　①太郎も床を軋ませた　②*太郎も軋んだ

このことは(6i)と整合的であり，この種の述語形式が語彙的使役を担っていることを直ちに支持するデータのように見える．ところが，これらのテストの判定を左右しているのが，実際には埋め込み構造の有無ではなく，むしろ被使役主の有生性（animacy）や動作主性である可能性が拭えない．というもの，「自分」の先行詞になれるのは，有生物とみなせるものに限るため，(10)のように被使役主が「靴音」のような無生物はそもそも「自分」の先行詞になれず，また，「そうする」の主語になれるのは動作主とみなせるものに限るため，(11)のように「*天井もそうした」という言い方がそもそもできないからである．（「太郎もそうした」とは言えるものの，「太郎も軋んだ」という解釈はとれない．）このことは，次のように被使役主に動作主と被動者のどちらもとれる動詞を確認すると，より一層明らかである．

(12)　a.　花子 $_{i}$ がミニ四駆 $_{j}$ を自分 $_{i/*j}$ のやり方で走らせた．
　　b.　花子 $_{i}$ が太郎 $_{j}$ を自分のやり方 $_{i/j}$ で走らせた．

(13)　a.　花子が太郎のミニ四駆を 5 分走らせると，｛太郎も／*次郎のミニ四駆も｝そうした．
　　①太郎も自分のミニ四駆を 5 分走らせた　②*太郎も走った
　　b.　花子が太郎を 5 分走らせると，次郎もそうした．
　　①次郎も太郎を 5 分走らせた　②次郎も 5 分走った

「自分」テストを適用した(12)，「そうする」テストを適用した(13)のいずれでも，被使役主が動作主とみなせる b については，埋め込み構造が確認できるものの，そうではない a については，埋め込み構造の有無が確認できない．

以上より，現時点では(4)の述語形式に埋め込み構造がないと言い切ることはできないものの，埋め

込み構造がないという分析は可能であると考えられる．

3. 実現可能性のなさとしての間接性

では，(6ii)に示したように，-(s)ase 接辞を含む述語形式が埋め込み構造を持つ間接使役を表す場合があることは，-(s)ase 接辞の意味機能を(7)であると仮定した上で，どのように説明されるのか．この点について，次のように考える．

(14) ある動詞において，語彙的使役形式と-(s)ase 接辞を含む述語形式が同一の結合価（valency）を持つ場合，後者は前者と形態的に異なることだけを理由に，前者とは結果事象（caused events）の実現可能性（feasibility）の点で異なる意味が推論される

(14)は Miyagawa (1984)及び宮川（1989）のブロッキングの考え方を採用し，語彙的使役に相当するものが既に-(s)ase 接辞以外の形態で存在し，かつ，その語彙的使役形式と-(s)ase 接辞を含む述語形式が同じ結合価である場合には，後者は前者と異なる含意（implicature）を持つことを述べたものである．従来はその「異なる意味」が間接使役にあたるとされてきたが，ここでは，それを実現可能性の違いと考えることで，埋め込み構造を持ち，間接使役を表す文のうち，これまで主に取り上げられてきた被使役主が動作主であるタイプだけでなく，(5)に挙げたような被使役主が被動者であるタイプも含めて議論することが可能になる．以降，便宜上，両者を次のように呼ぶ．

(15) A タイプ：被使役主が動作主
P タイプ：被使役主が被動者

そして，実現可能性は以下のように考える．

(16) ある話者が，
(i) 使役主が然るべき手順を踏みさえすれば，結果事象が常に実現すると認識している場合，結果事象は [+feasible] の値を持ち，語彙的使役形式を用いるのが適切である
(ii) 使役主が然るべき手順を踏んでも，結果事象が実現しないこともあり得ると認識している場合，結果事象は [-feasible] の値を持ち，-(s)ase 接辞を含む述語形式を用いるのが適切である

これまで「間接性」という概念は主に A タイプを説明するために用いられてきた．しかし，この「間接性」も「実現可能性」から自ずと導かれる．というのも，A タイプでは使役主とは別に主体性を持った被使役主が存在するがゆえに，使役主の意図とは異なった結果事象が，被使役主の主体性によって引き起こされ得るからである．そのため，(1a)のように-(s)ase 接辞を含む述語形式を用いる場合が多い．但し，(2b)のように被使役主が動作主であってもあえて語彙的使役形式を用いて表現することは可能である．それは，あえて語彙的使役形式を用いることで，例えば，使役主の権力の強さを表現したり，もしくは，実現可能性が度外視されるような，例えば，演出家が舞台の配置を考えたりする場合

(17) 舞台の中心に村人役を 4 人並べて…

では，被使役主が動作主であっても，語彙的使役形式は適切だと思われる．

(16)から予測されることは，被使役主が被動者であっても，話者が結果事象が実現しないこともあり得ると認識した場合には-(s)ase 接辞を含む述語形式が用いられるということであり，実際，(5)に挙げたような P タイプがそれにあたる．例えば，(5g)の文脈では，被使役主が被動者の「髪」だとしても，使役主の思い通りの髪の状態を実現するのが困難であり，したがって，結果事象は [-feasible] を持つため-(s)ase 接辞を含む述語形式が適切になる．また，(2a)のように，「椅子を並ばせる」は確かに通常の文脈では適さない．なぜなら，使役主が椅子が並んだ状態を実現することは一般的に容易だからである．ところが，

(18) 無重力空間で十脚もの椅子を一列に並ばせるのは困難だ．

のように，結果状態の実現に困難を伴うような文脈では，結果事象は [-feasible] を持ち，-(s)ase 接辞を含む述語形式が適切となる．(5)に挙げたその他の例も同様の仕方で説明される．[5]

さらに，実現可能性を想定することは，以下に示すように語彙的使役形式と-(s)ase を含む述語形式で結果キャンセル（池上, 1981 など）の容認度に差が生じることからも支持される．[6]

(19) a. 一生懸命，火打ち石で枯れ草を燃えさせたけど，燃えなかった．
b. ?一生懸命，火打ち石で枯れ草を燃やしたけど，燃えなかった．

日本語では，多くの場合に語彙的使役形式でも結果キャンセルが可能だと言われているが，(19)に示したように，-(s)ase 接辞を含む述語形式の方が比較的容認しやすいように思われる．このことは，両者の実現可能性の値の違いから予測される．

また，P タイプを説明する上で，実現可能性を想定する利点が別に存在する．(5a)について，高見（2011, p. 153）は「プラスチックが自らの力で固まるという事態を引き起こしているという意味合いが強い」と述べており，P タイプも A タイプの下位タイプとして捉えているように思われる．確かに，プラスチックに関しては，自発性（spontaneousness）と呼べるような性質を認めることはできるが，これによって(5b, c, d, e, f)は説明されない．そこで，実現可能性を想定することで，被使役主が動作主か被動者かでの違いはあるものの，A タイプと P タイプのどちらも話者が結果事象の実現可能性が問題になると認識した結果，産出された文であると説明でき，A タイプを典型例とみなすことはできても，A タイプが上位タイプで，P タイプがその下位タイプであるとみなすべきではないことがわかる．すなわち，自発性も結果事象に [-feasible] をもたらす 1 つの要因に過ぎない．

最後に，依然として-(s)ase 接辞の意味機能は(7)が適切であることを確認しておく．(6i)に示したように，語彙的使役形態を持たない動詞を 2 項述語として用いる場合には，使役主が何らかの手段で追加される必要がある．そこで，-(s)ase 接辞がかり出されることになり，出来上がった述語形式は，語彙的使役形式として機能する．この時に-(s)ase 接辞が果たしている意味機能は(7)そのものである．また，(6ii)に示したように，語彙的使役形態を持つ動詞においても，2 項の-(s)ase 接辞を含む述語形式は単に(7)の意味機能を果たしている．ただ，結果として，結合価が語彙的使役形式と同じであるがゆえに，形態的な違いから実現可能性の違いが推論されるに過ぎない．つまり，-(s)ase 接辞の “elsewhereness”（Miyagawa, 1998） により 2 つの-(s)ase があるように見えるが，-(s)ase 接辞の意味機能は一貫して(7)であり，実現可能性の違いも-(s)ase 接辞が本来的に持つものではない．

4. -(s)ase と-(s)as の区別：-e 接辞テスト

ここまで，-(s)ase の意味機能が(7)と主張してきたが，この主張は-(s)ase 接辞の意味機能を単純化しすぎてしまい，高見（2011）が以下で指摘しているような，-(s)ase と-(s)as の違いが説明されないのではないかという懸念が生じうる．

(20) 「−さす」使役と「−させ」使役の意味の違い：
自動詞が対応する他動詞を持たない場合，「−さす」使役は，使役主が自らの意志や力で当該事象を引き起こすことを表す傾向が強いのに対し，「−させる」使役は，被使役主が自らの意志や力で当該事象を引き起こすことを表す傾向が強い．（高見, 2011, p. 160）

このことを支持する例として，(21)が挙げられている．

(21) a. ?監督は，最初の台本通りに，俳優をその場面で転ばすことにした．
b. 監督は，最初の台本通りに，俳優をその場面で転ばせることにした．
（高見, 2011, p. 158）

[5] 但し，P タイプが埋め込み構造を持つことを示すテストは今のところ提案されていないように思われる．2 節で議論したテスト以外に，副詞修飾テスト（Shibatani, 1973），尊敬語化テスト（久野, 1983），選言テスト（Kuroda, 2003）などが提案されているが，いずれも被使役主が被動者の場合には適用することが難しい．P タイプが埋め込み構造を持つことをどのように示すのかについては今後の課題である．
[6] 三田寛真氏の指摘による．

ところが，筆者には両者にあまり差が感じられず，三宅（2018, p. 24-25）も「[…] ただし，高見（2011）の指摘する『違い』は明確なものではなく，この二つの間に違いがあるとすることが論証されたとは言い難い」と述べている．そこで，本稿では，(20)の指摘が当てはまる述語形式においては，-(s)as を含む述語形式が語彙的使役形式として機能している，つまり，それらの述語形式は-(s)as 以外の接辞付加で他動詞形態が派生されている他動詞（例 sodat-u「育つ」> sodat-e-ru「育てる」）と等しいと考える．逆に言えば，そのような地位を持たない-(s)as は単に-(s)ase の異形態にすぎないと考える（Miyagawa, 1984; Kuroda, 1993）．このような-(s)as 接辞の扱いの区別については，二重使役テストや尊敬語化テストなど（Kuroda, 1993）がこれまで提案されているが，本稿では新たに「-e 接辞テスト」を提案する．但し，このテストがその他のテストより何らかの点で優れているという議論をするのではなく，ここでは-(s)ase と-(s)as をめぐる語彙的使役と統語的使役の区別の問題をより詳細に検討する手段を提供することを意図している．

以下が-e 接辞テストの詳細である．

(22) ある-(s)as を含む述語形式に-e 接辞を付加した際に，
  (i) 可能の解釈が得られる場合には，その述語形式における-(s)as は他動詞形態を派生する接辞（-akas, -as, -e, -os, -s, -se など）の一種であり，
  (ii) 可能の解釈が得られず，使役としてしか解釈できない場合には，その述語形式における-(s)as は-(s)ase の異形態である

次の例はいずれも-e 接辞をつけた場合に可能の解釈が得られるため，-(s)as は他動詞形態を派生する接辞の一種である．

(23) a. 花子が目標としてきた地点まで紙飛行機を飛ばせた（tob-as-e-ru）．
  b. 太郎が重たい岩を一人で 2 メートル動かせた（ugok-as-e-ru）．
  c. 花子は新しいドライヤーのおかげで髪を 3 分で乾かせた（kawak-as-e-ru）．

一方，次の例は(23)と比べ，可能の解釈が得られにくいと思われる．したがって，-(s)as は単に-(s)ase の異形態である可能性が高い．

(24) a. 太郎が目標としてきた地点までボールを弾ませた（hazum-(s)ase-ru）．
  b. 花子が目標としてきたタイムでミニ四駆を走らせた（hasir-(s)ase-ru）．
  c. 太郎が目標としてきた地点まで凧を浮かせた（uk-(s)ase-ru）．

また，このことは，可能接辞-(r)are や「～ことができる」が，-e 接辞が可能接辞として機能する(23)の述語形式には付加できず，-e が-(s)ase の一部である(24)の述語形式には付加できることからも支持される．[7]

(25) a. 太郎が目標としてきた地点まで紙飛行機を｛?飛ばせられた（tob-as-e-rare-ru）／??飛ばせることができた（tob-as-e-ru-kotaogadekiru）｝．
  b. 太郎が重たい岩を一人で 2 メートル｛?動かせられた（ugok-as-rare-ru）／??動かせることができた（ugok-as-e-ru-kotogadekiru）｝．
  c. 花子は新しいドライヤーのおかげで髪を 3 分で｛?乾かせられた（kawak-as-e-rare-ru）／??乾かせることができた（kawak-as-e-ru-kotogadekiru）｝．

(26) a. 太郎が目標としてきた地点までボールを｛弾ませられた（hazum-(s)ase-rare-ru）／弾ませることができた（hazum-ase-ru-kotogadekiru）｝．
  b. 花子が目標としてきたタイムでミニ四駆を｛走らせられた（hasir-(s)ase-rare-ru）／走らせることができた（hasir-ase-ru-kotogadekiru）｝．
  c. 太郎が目標としてきた地点まで風船を｛浮かせられた（uk-(s)ase-rare-ru）．／浮かせることができた（uk-ase-ru-kotogadekiru）｝．

[7] 「～ことができる」の例は三田寛真氏の指摘による．

-e 接辞テストを用いて他動詞形態ではないと判断されたものには，(20)のような違いはないと思われる.[8] したがって，(20)で挙げられている違いの存在が直ちに本稿の分析の問題とはならない.

5. まとめと課題

本稿は，使役接辞-(s)ase の意味機能を(7)のように定義し，「間接性」の解釈は語彙的使役形式のブロッキングによって推論されると主張した．また，「間接性」は「実現可能性」から導かれる概念であることを提案し，結果事象が [-feasible] の値を持つ場合には，被使役主が動作主であろうと被動者であろうとブロックされた-(s)ase 接辞を含む述語形式が用いられると説明した．但し，「間接性」が推論によって得られる解釈だとすると，統語構造に埋め込み構造が具体的にどのような仕組みでもたらされるのかについては説明が必要になるが，この点は今後の課題としたい.

参照文献

Harley, Heidi. (2008). On the causative construction. In Miyagawa, Shigeru (Ed.), *The Oxford handbook of Japanese linguistics*, (pp. 20-53). Oxford: Oxford University Press.

池上嘉彦. (1981).『「する」と「なる」の言語学』東京: 大修館.

Jacobsen, Wesley M. (1991). *The transitive structure of events in Japanese*. Tokyo: Kurosio Publishers.

久野暲. (1973).『日本文法研究』東京: 大修館.

久野暲. (1983).『新日本文法研究』東京: 大修館.

Kuroda, S.-Y. (1993). Lexical and productive causatives in Japanese: An examination of the theory of paradigmatic structure, *Journal of Japanese linguistics 15*, 1-82.

Kuroda, S.-Y. (2003). Complex predicates and predicate raising, *Lingua 113*, 447-480.

Matsumoto, Yo. (2018). Phonological and semantic subregularities in noncausative-causative verb pairs in Japanese. In Kageyama, Taro & Wesley M. Jacobsen. (Eds.), *Transitivity and valency alternations*, (pp. 51-88). Berlin: De Gruyter Mouton.

Miyagawa, Shigeru. (1984). Blocking and Japanese causatives, *Lingua 64*, 177-207.

宮川繁. (1989).「使役形と語彙部門」久野暲・柴谷方良（編）『日本語学の新展開』(pp. 187-211). 東京: くろしお出版.

Miyagawa, Shigeru. (1998). (S)ase as an elsewhere causative and the syntactic nature of words, *Journal of Japanese linguistics 16*, 67-110.

三宅知宏. (2018).「日本語の「使役」をめぐってI：問題点の指摘と整理を中心に」『待兼山論叢：日本学篇』 *52*, 19-37.

大月穣・荒木孝二. (1997).「望み通りに分子を並ばせる：分子化学から超分子化学へ」『生産研究』*49*, 125-130.

定延利之. (1991).「SASE と間接性」仁田義雄（編）『日本語のヴォイスと他動性』東京: くろしお出版.

Shibatani, Masayoshi. (1973). Semantics of Japanese causativization, *Foundations of language 9*, 327-373.

高見健一. (2011).『受身と使役：その意味規則を探る』東京: 開拓社.

[8] 但し，この点については今後検証が必要である.